

月報

<438号>

ケルン・ボン日本語
キリスト教会

二〇一七年十一月五日発行

教会創立四〇周年を迎えるにあたり

― 神の御心を深く知る ―

佐々木 良子

恵みにより神はケルン・ボン日本語キリスト教会を生かし続けてくださり、一月で四〇周年を迎えることができ主に感謝いたします。教会がどのような時にも神はそこにおられ、共に歩んでくださったからこそ、このように私たちの今があることを思います。そしてこれからも私たちと共に歩んでくださることに期待して、更に前進していくことができたら幸いです。

これまでの歩みを振り返りますなら、四〇年と一口にいても希望に燃えて前進したとき、あるいは計画通りにはいかず落胆したとき、紆余曲折だったと思います。そこを通して人の計り知ることのできない神の御計画を見せて頂きながら、時を刻んできたのではないのでしょうか。

聖書の様々な箇所には人の計画通りではなく、むしろ行き詰まりと挫折を通して大きな展開を成し遂げたことが多く記され励まされます。そこを踏み込まなければ主と深く出会うことはできないと言っても過言ではないと思います。全知全能の神の偉大さに触れながら前進させて頂く私たちです。

使徒言行録一六章六、一〇節には、伝道者パウロが計画していた伝道旅行が、主によって二度も阻まれ、予想もなかった方向に進むことになったことが記されています。彼は弟子たちと共に、ローマ帝国のアジア州に伝道する予定でした。しかし、御言葉を語る事を聖霊に禁じられ、前に進む事を主イ

エヌの霊に止められ、南も北へも行く手が塞がれ、仕方なく計画を変更して西へと進むことになりました。

彼らがエーゲ海に面したトロアスの港に到着した時、「『マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください』と言ってパウロに願った。パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである」(九、一〇節)と、記されています。

パウロたちを先にマケドニアへと向かわせることによって福音が初めてヨーロッパに伝えられ、大きな発展を遂げました。彼らが当初予定していた工フォソやビティニアに行けなかったことは、全てはヨーロッパ伝道、ひいては世界伝道のための神の壮大な計画であったことを後で知ることになりました。神のご計画はその時には誰も知ることはできないものです。

信仰の世界は私たちの意思や努力によって、新しい道を切り拓いていくものではないことが分かります。神が導いてくださった所に、道が開けていることを見出し、神の御業に驚きと感動をもって歩むことが信仰生活に生きるといふことです。

時には絶壁から突き落とされたように思えることもあります。しかし絶壁と考える人間の不可能を可能にしてくださいと細い道が既に備えられています。人の貧しい知識や経験を遥かに超えた大きな祝福を与えるためのものです。この喜びを幾度となく経験させて頂いていますから、忍耐をもって神の御業を待ち望むことができますのです。

つい最近、わが家の集会でとても興味深い話を伺いました。『マシユマロは食べるな』というスタンフォード大学の心理学者による子どもたちの反応の研究です。四歳の子どもたちに「これからここに

マシユマロを置いておく。一五分して私が戻ってきた時にまだマシユマロがあったら、もう一個もらえるよ。マシユマロを二つ食べられるんだ。」と言ってその場を去ります。

当然すぐに食べてしまおう子もいれば、我慢して食べない子もいました。その何十年か後に追跡調査をしました。面白いのがその違いで、マシユマロを我慢していた子どもは、すぐに食べてしまった子どもに比べて仕事、収入、人間関係、家族関係等のあらゆる点ではるかに上手く行っていたそうです。今、我慢したら後でもう「貰える」という約束の言葉を信じて従った子どもと、従わなかった子どもとの歴然たる違いです。

私たちの教会は二〇一八年に向けて様々な計画を立てています。見通しのきく道を歩ませて頂いたら、どんなに嬉しいことでしょう。しかし、パウロの伝道旅行から分かるように、「わたしの思いはあなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なる」と主は言われる。「(イザヤ書五五章八節)との如く、神の深い御心に私たちの心を合わせていけたら幸いです。

信仰は自分の思い、計画を全うすることではなく、神がしてくださる業を待ち望むことです。今、忍耐すればマシユマロが更に一つ与えられるといった程度のもではありません。しかし待ち望むということは、頑張ることができるのではなく、神の真実な約束の中に必ず私たちの祝福の全てがあると信じて従っていくのみです。

教会は私たちが何か力あることを示すものではなく、神の深い御心に従ったことにより、多くの祝福を頂くことを指し示していく場でもあります。信仰が最後の最後まで貫かれ、想像もなかった扉を開けてくださることを心から信じる者にさせて頂きたいです。これから先どのような驚きと感動を与えてくださるのでしょうか。神の深い御心がどこにあるのか楽しみです。

恵みを受けけるばかりのロマ

浪川 幸彦

ケルン・ボン日本語教会には四度お世話になった。そのたびごとに教会からは溢れるばかりの恵みを受けた。始めは教会が実質的に発足して間もない一九七八年四月から九月まで、二回目は一九八二年一月から八四年九月まで、三回目は一九八七年六月から一九八八年九月まで、そして四回目は一九九五年一月から一九九六年二月までである。長短様々だが、むしろそれぞれの滞在が私と家族との歩みの異なるステージに重なっている。分かりやすいのは家族構成で、初回の時は独身、二回目は妻秀子と長女恵理子を同伴、三回目は加えて長男哲彦、四回目はさらに加えて次女尚恵、と家族が大きくなっている。

(一) 出会い

一九七八年四月畏友上野健爾夫妻を通して私は神様に出会った。正確には再び出会った。「人間がだればからずしゃべることのできる、観念や思想や道徳や、そういうところで人間はだれも神様に会うことはできない」(森有正「土の器」)。そこで私は前年一月に発足したばかりのエクレシヤに導かれた。

それは当時ボン大学に留学されていた改革派牧師牧田吉和氏が中日新聞特派員(当時)五十川仁達美智子夫妻等と始められた家庭聖書集会である。私に参加した当時、一〇名程度のささやかな集まりだった。しかしきわめて特色のある集団だった。まず信仰を持った人達の属する母教会が日本のキリスト教界の縮図のようだった。牧田牧師は改革派、五十川夫妻はパプテスト、さらに日本キリスト教団、ドイツ国教会(ルター派等々)。私自身は無教会に属していた。出自に関係なく、共に聖書を学び、イエ

ス・キリストを賛美する集まりがこうして現実に存在することを知った。そしてこれを可能にしたのは、牧田牧師の聖書に基づく力強い説教であった。特に私はこのとき聴いた放蕩息子(ルカ一五章)の説教を忘れることができない。

そして本当に暖かい集まりだった。当時稲葉一氏が癌であることが判明した。集会は全力を挙げて祈り、また実際に身重の夫人を支えた。この闘病の中で稲葉氏は明確な信仰を与えられ、病も乗り越えて、今は牧師として活躍されている。

(二) 「家族」と共に

二度目の滞在の時は、前年に結婚した妻秀子と生まれて半年の長女恵理子を伴っていた。家族を伴って訪れたドイツは独身時代と全く違う様相を見せた。二度の訪問で多少ともドイツを知ったつもりだったが私にこれは驚きだった。店では店員が言葉の不自由な家内を助け、バギーを伴ったバスの乗降などでは周りの人達がさっと手助けしてくれた。これが今の日本には決定的に欠けている。外国人問題や少子化問題は(自分を含め)一般の人達の意識改革なしには決して解決しない。

閑話休題。教会も「ケルン・ボン日本人キリスト教会」と名前を変え、制度的にも整備されていたが、何より織田信行牧師の下で藤井隼人弘子夫妻等を中心としたドイツ在住の方々によるエクレシヤとしての充実した姿に感銘を覚えた。教会がケルンになってボンから子連れで出かけるのはちよっと大変だったが、途中の田園風景が私達を和ませてくれ、特に数力所の牧場にいる放し飼いの馬に子供達(三度目は哲彦もいた)は大喜びだった。

お借りしたマンションがかなり広かったので、ボン在住の人達を中心に毎月開かれていた聖書研究会の開催場所を途中からお引き受けした。ここで織

田牧師を中心に良い聖書の学びができたのは無論だが、加えての楽しみは集会後のお茶の時間、「織田屋・パティスリー伊藤・尾畑名菓堂」の老舗ケーキに舌鼓を打った(月報五六号)。

忘れがたい思い出がある。住居からは Kreuzbergkirche という教会が望まれ、少し遠い散歩道だった。その途中に修道院があったが、そこに碑がはめ込まれ、「四七四人のユダヤ人が収容された後に絶滅収容所 Vernichtungslager に送られた。七人の生存だけが確認されている。」(部分訳)とあった。実はボン大学の著名な数学者がこの犠牲者の一人で、大学にはその記念碑もあるが、その「現場」がここだと知った。ドイツはこうして過去の過ちをきちんと記念している。

忘れられない人との出会いもあった。デュッセルドルフでのクリスマス礼拝で、今や世界的演奏家となった鈴木雅明氏のオルガンを初めて聴いた。奥様がまだ幼かった鈴木優人氏を抱っこされていたのを懐かしく思い出す。鈴木氏には BCJ の演奏会で毎年お目にかかっている。

(三) 故郷の教会

三度目の滞在では哲彦が生まれて四人家族になっていた。来独に当たって恵理子の教育が問題だったが、幸い日本で受けていたのと同じモンテッソーリ教育の幼稚園に通うことができた。このときの滞独は恵理子に決定的な影響を及ぼした。その第一は教会生活、特に日曜学校である。教会には恵理子と同じ年(一九八二)に生を受けた藤井潔君、尾畑順一郎君、松田健嗣君がいた。教会では聖日礼拝・日曜学校だけでなく、様々の行事があって、一緒に出かけることも多かったし、家族ぐるみの交際もあった。こうして教会は恵理子にとって心の故郷になり、彼女の受洗(二〇〇七)につながった。

子どもの信仰はその自由に任せると称して何もしなかつた怠惰な父親にとって、これは望外の恵みで感謝が尽きない。

また私達一家にとつて小塩節先生と主にあるお交わりを許されたことは三回目滞在での最大の恵みである。先生は当時ケルン日本文化会館館長として赴任されていたが、激務の中を当教会の日曜礼拝に出席されただけでなく、度々講壇にも立つて深いお話を聴かせて下さった。私が聖書の信仰を最初杉山好先生から与えられたことからドイツ語とバッハの音楽という共通の話題について個人的にお話しする機会も多く、帰国後も今に至るまで親しくして頂いている。恵理子の結婚に際しては主賓として「ケルン・ボン教会を代表して」とお祝いの言葉を頂戴した。最近では信州穂高での集いで二度にわたりの「ファウスト」を講じて下さった。さらに小塩先生ご夫妻が今ケルン・ボン教会を支える先頭に立つて下さっていることは読者に周知のことであり、感謝が尽きない。

(四) 家族の全てが

四度目の滞在は三ヶ月の短いものであったが、次女の尚恵をも含め家族全員で過ごせたことが最大の恵みであった。教会は「ケルン・ボン日本語教会」と名前を変え、また大きな危機を乗り越えて、しかし変わらない暖かさと共に私達を迎えてくれた。子供達それぞれにはドイツでの学校生活と共に忘れ難い日々となった。

このときから既に二〇年余りの時が流れ、子供達は皆独立した。間もなくケルン・ボン日本語教会は四〇周年を迎える。一文を草するよう求められ、このように改めて来し方を振り返ってみると、恵みを受けてきたばかりの(家族を含めた)私自身を見出す。教会とこれを担ってきた方々と、そして全て

をなし給うた主なる神に心からの感謝を捧げて拙文を閉じる。主にありて。

ケルン・ボン日本語キリスト教会の黎明期に
出会う

松平 光代

時間は今から約四〇年(も)前、ボンがまだ西ドイツの首都だった頃に戻ります。当時のボンには大使館や報道関係の方々及びその家族又、ボン大学の学生など、現在より多くの日本人が暮らしており、斯くいつ私も、ケルン音大生でケルン在住ながら、ボンが最初のドイツ滞在地で親しいご家族、友人もいた為、週末はボンで過ごすことの多い生活でした。多くの日本人の中には当然クリスチャンもいて、ドイツの教会に赴いた方々もおられたことと思いますが、日本語によるキリスト者としての生活を守りたいという熱い思いを持ち、それを実行に移した方々もおられました。

渡独後直ぐに交通事故に見舞われるという試練にも拘わらず、早々に毎土曜午後、聖書を読む会を立ち上げられた、当時の在独中日新聞特派員のご家族も、そのような使命感を持ったクリスチャンホームで、始めはそのファミリを公私共にサポートしていたボン大生の友人が声をかけられ、程なくその友人に誘われて、西洋音楽を勉強して聖書を知らない事に「？」を感じていた私も入れて頂いた、というのが私の御言葉との最初の出会いです。

そしてその場で唯一ピアノが弾ける者であった為、即、讚美歌伴奏を仰せつかるという大きな恵みをお戴きました。何しろ私の家は曹洞宗、中・高時代は仏教系の学校でしたから、これが正真正銘の讚美歌デビュー、いとも大胆な神様の御計らいでありました。

一方、ボン大学には留学中の牧田牧師ご一家がおられました。会派の異なるキリスト者が同一礼拝を持つということは、特別な場合を除き稀でしょうが、日本という枠を離れた「寄留の地」にあつては、「それはさて置き」砂漠でオアシスを恋い求めるが如く、日本人キリスト者は日本語による御言葉の説き明かしの場を乞い求めていたのです。又、キリスト者に限らず「寄留地」故に、母国語による魂の救いを求めている人々も勿論居た訳です。勉強に勤しむ牧田先生もその必然性を受け入れられ、寮の集會室をお借りしての日本人キリスト教ボン集會が、正しく主の御導きによって、守られることになったのでした。そしてそこで毎回語られる力強い主のメッセージが、求道者たちの目を開き耳に響き、心の扉を敲いて、受洗へと導いていきました。

日本語によるキリスト者の集いは、このように一校一校を伸ばしつつ、小さな集まりならでの、それぞれの賜物の生かされ方が為されていきました。

社会人も学生も主婦も子供も、一人一人が皆何らかの役割を担っており、皆で礼拝を支え合っていたのです。中心には「日本語による」主の御言葉がありました。牧田先生ご一家がオランダへ移られた後も、祈りによって、西宮教会から棟方先生ご夫妻という素晴らしい牧者をお迎えすることが出来、場所も新たにケルンの地の教会を与えられて、デュッセルドルフからの兄弟姉妹も加われ、ここにケルン・ボン日本人キリスト教会が誕生したのでした。

このようなケルン・ボン日本語キリスト教会の黎明期に、音楽を勉強していたが故に主と出会う、終始奏樂者として用いて頂き、主イエス・キリストの一枝として歩ませて頂いた計り知れない恵みに、ただただ感謝するのみです。私が受洗させて戴

いたのは、つまり母教会はケルン・ボン「日本人」キリスト教会でしたが、二年前、現在の横浜指路教会に転会する際、名称が「日本人」から「日本語」に変更されていることを知り、又、今回の原稿依頼をお受けするに当たって、改めてその意味を考えてみました。四十年前に生まれた日本人キリスト教ボン集会所がミッションとしていたもの——ケルン・ボン日本人キリスト教会が受け継ぎ、使命としてきたもの——それは正しく、日本語による主の御言葉の説き明かしの場であり続けること、日本語による伝道をし続けて行くこと——それを具現化した名称なのだと思いき、改めて深く感慨を覚えています。

現在のケルン・ボン日本語キリスト教会の上で、敬愛する兄弟姉妹の御働きの上に、主の祝福とお支えと、そして御導きが豊かにありますように…。アーメン。

◇ 報 告 ◇



◇一〇月はかつてケルンに在任し、共に礼拝をお捧げしていた一兄やM姉が日本よりお出でくださり、共に礼拝をお捧げした後、懐かしい話に花が咲き楽しい時を持つことができました。

◇牧師は、一〇月三日(月)〜五日(水)、南ドイツバード・リーベンツェルにおいて欧州教職者研修会に参加いたしました。又、二五日(水)〜二七日は、シュトゥットガルトにおける家庭集会所にて幸いなご奉仕をさせて頂きました。

◇一〇月一日(水・祝)に第三七回教会バザーが開催されました。今年もバザーの準備・開催にあたりたくさんの方々のご協力をいただきました。心から感謝いたします。総売上は4,284,73ユーロとなり、経費を引いた3,710,60ユーロ全額をディア

コニーの「世界にパンを(Brot für die Welt)」の活動に献金いたします。

◇ 予 告 ◇

◇一〇月二二日は、教会創立四〇周年を迎えるにあたり、記念礼拝をお捧げ致します。日頃お世話になっているドイツ州教会に關係する先生方もお招きする予定です。

教会創立四〇周年記念 日独語礼拝&祝会

日時 一〇月二二日(日) 礼拝一四時、

※ドイツ語訳あり、礼拝後祝会

フルーツ特別演奏 鷲尾洋氏

◇一〇月二六日(日)午後四時より、ママの子育ての学びにいらしているファミリーの音楽家の方々を中心に子どもも参加するコンサートを開くこととなりました。どうぞお越しください。

♪ ファミリーコンサート ♪

日時 11月26日(日) 16時~17時

場所: ボンハッフアー教会

第一部 子どもたちの演奏
第二部 大人によるソロ演奏
ヴィオラ、オーボエ、ピアノによる演奏

曲目 Oh,Tannenbaum!
きよし この夜



【十一月の主な礼拝・集会の予定】

- 一〇月 一日(水・祝日) バザー 一三時
- 二日(木) 聖書を学ぶ会 入門編 一六時(牧師宅)
- 四日(土) メアプッシュコ家庭集会所 藤井兄・姉宅 一〇時三〇分
- 七日(火) 聖書を学ぶ会 一〇時(牧師宅)
- 九日(木) ケルン家庭集会所 一一時(シュミット姉宅)
- 一〇日(金) 聖書を学ぶ会 入門編 一六時(牧師宅)
- 一二日(日) 子どもの礼拝 一二時三〇分
- 一三日(月) ママの子育ての学び会 一三時(牧師宅)
- 一九日(日) 合同礼拝・聖書の食事 一一時一五分
- 二二日(火) 聖書を学ぶ会 一〇時(牧師宅) 助言会議(Beirat) 一六時
- 二六日(日) 大人と子どもの合同賛美礼拝 一四時

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
Japanische Evangelische Gemeinde
Köln-Bonn e.V.

<主日共同礼拝>
会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche
住所: An der Decksteiner Mühle 1
50935 Köln (Lindenthal), Germany
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

<牧師> 佐々木良子 (Fr. Pfr. Ryoko SASAKI)
牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln
固定電話: 02234-9298792
携帯電話: 0151-2910 6278
Email: r310130s@yahoo.co.jp

<ホームページ>
http://koelnbonn.jp

<振込口座>
IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
BIC: PBNKDEFF